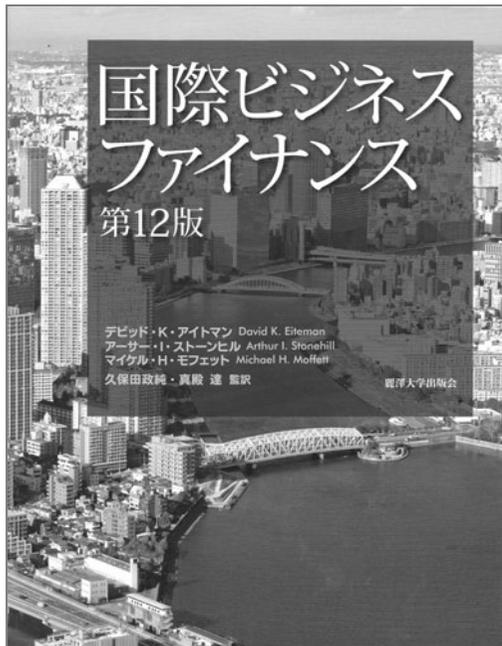


## 良書紹介

### 『国際ビジネスファイナンス』第 12 版

デビッド・K・アイトマン、アーサー・I・ストーンヒル、マイケル・H・モフェット  
久保田政純・真殿 達 監訳

諸井 勝之助



1 1984年4月、東京大学を定年退職した私は、青山学院大学国際政治経済学部において「国際ファイナンス」（はじめの名称は「国際財務論」）の4単位通年講義を、定年まで15回担当した。そのうち最初の2回は非常勤講師として、後の13回は専任の教授としてである。

「国際ファイナンス」は、円とドル、あるいはドルとユーロというような複数通貨を前提とするファイナンスの領域で、「企業ファイナンス」を履修したあとの各論とも

いうべき科目である。しかし、国際政治経済学部のカリキュラムには「企業ファイナンス」は設けられていなかったもので、私は資本予算とかポートフォリオ理論といった「企業ファイナンス」で履修すべき領域をも取り入れながら講義を進めることにした。

このうち、「企業ファイナンス」については心配ないが、肝心の「国際ファイナンス」には自信がなく、にわか勉強せざるを得なかった。このような場合に大切なことは、優れたテキストなり参考書を速やかに探し出すことである。私が選んだのは、David K. Eiteman と Arthur I. Stonehill 共著の“Multinational Business Finance”という米国の教科書であった。最初に入手したのはその第3版だったが、たちまち第4版が刊行され、それ以後3年か4年おきに第5版、第6版（この版から Michael H. Moffett が共著者に加わる。）、第7版と版を重ね、青学を退任した1999年には第8版が最新版であった。

新しい版を入手すると、旧版と比べてどこが変わったかを調べ、それによって講義内容を刷新するように努めた。Moffett が加わった第6版では、通貨オプション市場に関する章が新設されたので、それを参考にして、それまで敬遠してきた通貨オプシ

ョンを授業に加えることができた。とにかく、現実の国際ファイナンスは日ごとに目まぐるしく変化し、アメリカの教科書もそれに歩調を合わせるように改訂されていくので、こちらは追随するのが大変であった。しかし、努力して講義内容を刷新することは、受講する学生達にとっても、講義をする本人にとっても大きなプラスであることは言うまでもない。

ところで、青学を定年退職してから早くも13年余の歳月が流れた。その間、私は心ならずも国際ファイナンスの研究から次第に遠ざかっていったが、“Multinational Business Finance”の方は着々と版を重ね、2010年には第12版が刊行されるに至っている。そして、本当にうれしいことには、その第12版の完全な邦訳が2011年12月に麗澤大学出版会から刊行されたのである。昨年末、700ページを越すこの大部の邦訳書を手にしたとき、青学時代に本書があればどんなによかったらうと思わざるを得なかった。

2 本書すなわちこの邦訳書の表題、原著者名、監訳名等を記すと下記のようなものである。

『国際ビジネスファイナンス』第12版  
デビッド・K・アイトマン、アーサー・I・ストーンヒル、マイケル・H・モフェット  
久保田政純・真殿 達 監訳  
麗澤大学出版会，2011年12月，10,000円＋税

内容に入る前に、監訳者代表の久保田政純氏が記す「まえがき」の主要部分を引用することにしよう。

「日本では、従来、外国為替の実務を中心に置く外国為替論、あるいは経済学

の一分野としての国際金融論などの研究は十分行われてきたものの、国際ビジネスファイナンスないし国際財務についてはかなり遅れており、大学でもこれをカリキュラムに持つところはきわめて少ない。

しかし、国際ビジネスファイナンスは原著「まえがき」にあるように多国籍企業の財務活動に重点をおき、コーポレートファイナンスをグローバルに展開するもので、グローバリゼーションの中核をなす多国籍企業に焦点をあてたものである。

現在の日本企業は、まさに多国籍化の最終段階に入りつつある時期であり、典型的内需型企業に至るまで怒涛のごとく国際化の進展を進めている。この点で『国際ビジネスファイナンス』の果たす役割は多大なものであると言えよう。本の内容としては単なるコーポレートファイナンスの理論面のみにとらわれず、広く多国籍企業の経営に携わるリーダーの育成という実務面での役割も強く意識している。その意味でも、国際化の時代における日本の現在並びに未来のリーダーにとっての必読書と言うべきものである。その真価は各章にあるミニ・ケースに見られるように実務に基づいたきわめて豊富な事例にあり、この点で類書を凌駕する。」

上記の引用文は、久保田政純氏がこの翻訳事業を企画し、多くの協力者の支援のもとに短期間のうちに本書を完成させたその原動力とも言うべき狙いを、よく示していると思われる。

本書がカバーする国際ビジネスファイナ

ンスの全領域は、全 6 部 22 章からなる下記の目次によく示されている。

第 I 部 国際財務を取り巻く環境

第 1 章 グローバリゼーションと多国籍企業

第 2 章 財務目標と企業統治

第 3 章 国際通貨制度

第 4 章 国際収支

第 5 章 国際金融が直面する諸問題：  
2007～2009 年の金融危機

第 II 部 外国為替理論と市場

第 6 章 外国為替市場

第 7 章 国際的パリティの条件

第 8 章 外貨デリバティブ

第 9 章 金利と通貨スワップ

第 10 章 外国為替レートの決定と予測

第 III 部 外国為替リスク

第 11 章 取引リスク

第 12 章 営業リスク

第 13 章 外貨換算リスク

第 IV 部 外国籍企業の資金調達

第 14 章 グローバルな資本コストと資本の  
アベイラビリティ

第 15 章 株主資本による国際資本調達

第 16 章 負債による国際資本調達

第 V 部 海外投資の意思決定

第 17 章 国際的ポートフォリオ理論と分散

第 18 章 海外直接投資の理論とポリティカル・リスク

第 19 章 国際資本予算

第 VI 部 国際業務管理

第 20 章 国際租税管理

第 21 章 運転資本管理

第 22 章 国際貿易金融

本書をどのように活用するかはさまざまだが、私としては、これを機に経営学系大学院に国際ビジネスファイナンスの科目が設置され、これまで看過されがちだったこの分野の研究教育が大いに進むことを切に希望したいと思う。